論文

繊維と作業療法 Ⅲ

難波 久美子

はじめに

高齢や障害があるなしに係わらず、それぞれの人間は、社会の一員である。福祉を福祉専門領域や医療専門領域の世界に閉じこめ、その社会の中での充実を図ろうとすることも不可能である。この認識を新たにし、自分が社会にとって何が出来るのかを考え、行動して行かねばならぬ時期にきている。

領域を明確にすることは、潜在する問題を顕在化させ、その把握と分析、そして解決に向かうベクトルつくりに大変効果を持つ。これにより、過去の、特に日本における作業療法も大きな飛躍と成長を成し遂げた。今日、その培った基盤のもとで、新たな方向性を模索する要求が、福祉の現場より叫ばれている。そしてそれは、作業療法の根本原理 (対象者を包括的に「ひと」として捉えること) を今一度真摯に受けとめ、今までに培ってきたものと有機的に結びつけて行くことが鍵と考える。

岡山県立大学デザイン学部紀要vol.4 No.1記載の繊維と作業療法Ⅱが、平成8年度岡山県立大学特別研究<繊維を用いた作業療法における調査研究>を基にしたと同様に、本論は、平成9年度岡山県立大学特別研究<繊維を用いた作業療法における調査研究>の成果を基に執筆した。

調査研究の概要

本研究は、前年度研究 (織物活動を実施している岡山県下の福祉施設を、高齢者関連施設・身体障害関連施設・精神障害関連施設の3つのカテゴリーに分類し、各々より1施設を選出し、その織物活動実施事例の現状を把握分析することを主とした) より得たデータをもとに、継続して同3施設において、各々の施設が抱えている問題点に焦点を置き、その解決および状況改善のために、テキスタイルデザイン専門領域を中心とした介入調査研究を実施したものである。ここでは、その中から、高齢者関連施設と精神障害関連施設における介入調査事例の検討を通して、作業活動としての織物作業活動の意義と活性化の可能性を考察することを目的に掲げる。

調査研究の方法:

研究者が施設現場に出向という形態で介入調査研究を実施した。出向の頻度は、各施設の既存行事等の妨げにならないこと、又、介入研究の運営に関して適切であることの両点を考慮し、スケジュールを作成し遂行した。

介入調査研究は、施設における織物活動プログラムの提示を、その実施を通して行った。プログラム指導者を施設職員と想定しているため、職員には入所者に対する行程援助と、入所者とプログラム全体のオブザーブを依頼した。調査研究の対象は、その作業対象者である入所者 (プログラムに対する適応反応等)、職員 (将来におけるプログラム指導者としての対応等)、および施設機関 (施設内でのプログラムの位置づけ・運用方法等) とした。介入調査の考察は、以下の観点を中心に行った。

1.調査研究の方向性
2.プログラム作成の留意点
3.プログラム内容
4.研究考察
(1) プログラム実施時間
(2) プログラム実施場所
(3) プログラム実施費用
(4) プログラム実施対象者
(5) 施設職員
(6) 施設機関
(7) プログラム製作品
5.まとめ

高齢者関連施設 A (特別養護老人ホーム)

1. 調査研究の方向性
・施設内でのプログラムの確立-----デザインワーク (図案・色の選択)・裂き糸作り・経糸かけ・織り・織りのバリエーション導入・完成品の企画 (完成品サイズ・色・かたち・配置等)
・プログラムとしての発展・展開-----新技法・高レベル技法への発展

2. プログラム作成の留意点
・自己選択の反映の場を増やす場面つくり-----デザインワークを含んだ実施行程の拡大
・活動の多様化-----織り技法・応用・展開の紹介

＊NAMBA Kumiko 工芸工業デザイン学科

3.「裂き織りプログラム」実施内容
10/27/97
施設管理者および職員との訪問調査全体の調整

11/18/97〈プログラム訪問第1回目〉
プログラム導入・デザイン・経糸張り

12/02/97〈プログラム訪問第2回目〉
布裂き・織り行程

01/20/98〈プログラム訪問第3回目〉
織り行程

02/03/98〈プログラム訪問第4回目〉
完成された裂き織りを基にした、クッションのデザインの決定（布色選定・布と織りの構成・作品タイトル・メッセージ）

02/24/98〈プログラム訪問第5日目〉
完成された製作物（クッション）の受け渡し（成果の確認・将来の活動への動機付け）

4. 研究考察
(1) プログラム実施時間：
10：00～11：30--90分で適当であった。作業に実際に係わる時間は、その半分ほどであるが、各時間における導入そしてまとめ（次回活動への引き継ぎ）を、各対象者の作業ペースやその日の体調等を考慮しながら行う必要がある。

(2) プログラム実施場所：
他の入所者の午前のおやつの時間を使って活動したため、他の入所者のプログラム実施への興味を傍観によって持たせ、活動の導入を図ることも可能かと思われた。作業自体に場所の特定性がないため、このように他者の中での活動も可能であり、指導に支障がなければ、傍観者への間接的関与の点よりもその方が望ましく思われた。今回は、何人かの入所者がなんらかの興味を示した。（他者に対する興味・新しいことを行っている状況に対する興味・織り上がった裂き織りのモノに対する興味）

(3) プログラム実施費用：
裂き織りプログラム自体の、設備・備品そして材料にかかる費用が低いためもあり、費用に関する施設負担は大きくなかった。今回施設負担されていない、縫製に係わる費用についても、将来的に個人や施設で充分負担できる範囲であると考える。

(4) プログラム実施対象者：
●Dさん：81才女性・C.V.A.・車椅子生活
プログラム以前:過去に日本刺繍を趣味に持っていたためか、繊維素材や結ぶこと・織ることに対しての適応は良い。過去2年の織物歴があるが、右片麻痺のため、左手のみでの作業となり、いままでは織り作業のみに従事していた。織り作業中の緯糸の繋ぎに関しては結ぶ行為を自ら選択し、左手と口を使っての作業を、自分で発見し実行していた。

プログラム途中：失語の傾向があるが、作業を通して言葉がより明確に、また語彙も増加していった。織り作業の終盤では、行為の認識に混乱を生じ、織り行程の完了前に経糸を枠機からとりはずしてしまった。これを、対象者は不本意な失敗と認識し、できると思っていたことができなかったことで、精神的落胆が大きかった。なにごともきっちり仕上げる性格が裏目にでてしまい、自信を喪失しかけたのである。しかし、基本的には織り上げられていたので、プログラム指導者によって、継続の行程が可能なように修復がなされた。その後、経糸を結んで処理をするという、対象者には初めての行程から、再度プログラムに係わっていった。はじめのうちは、やったことがない行程であることや上述の失敗による自信喪失で、この行程の実施を拒否していたが、精神的・物理的な作業療法士の援助や、行程が自己の得意とする結ぶという行為でもあったために、徐々に実施が可能となり、見失いがちであった自信の再獲得にも繋がった。
またこの件は、自分が困難に遭遇しているときに援助してくれたという、他者への感謝の気持ちがはっきりと意識された機会を作った様にも思われる。

プログラム以後：一度は断念しかけた、裂き織り作業であるだけに、それが遜色のないクッションに仕上がったときの嬉しさは、感涙に表現されるほど、非常に大きかったようである。何事もきちんと行う性格の対象者にとって、きちんとしたクッションが出来上がったことが、何よりもうれしかったのではなかろうか。仕上がり品の受け取り時には、感謝と感動の気持ちを素直に言語を通しても表現できていた。他者の製作品に対しても、失語傾向がありながらも、明確な反応と嗜好の反映が表現できていた。また、それを話題にして他者と会話を持つことも主体的に出来ていた。
今までは対象者にとっては困難とされてきた、お風呂の時間待ちが出来るようになったことが、寮母より報告

された。このことは、対象者に忍耐強さがでてきたり、他人を思いやることが出来るようになってきた証でもあり、また、それを表現することが出来るようになってきたことと解釈できよう。さらに、食堂でやかんを移動する行為・ふきんを畳む手伝いが初めて行われるようになったという報告もあった。これらは、他への感謝や、社会と自己との関連の中で、自分を見つめることが出来始める萌芽とも考えられる。

●Eさん：65才女性・C.V.A.・車椅子生活

プログラム以前：片麻痺で、左手のみの裂き織り作業を、本施設で過去2年行う実績を持つ。以前にも他の施設で、織物活動や籐で篭を編んだ経験も持つ。ゆっくりだが、マイペースを守って製作に向かうことが出来る。

プログラム途中：プログラムが進行するにつれ、徐々に意識の明確さ・周りの環境への反応等において、進歩が見られた。織り行程の途中より、他の対象者が独自に工夫実行していた技法（緯糸である裂き布を半分に折って、フラットな緯糸のまま織り込む）を、真似て使用し始める。この技法を最初に使った対象者は、結局諸事情によりプログラムからはずれてしまったが、その短期間の間に、この対象者が視覚確認によって学習していたものであり、真似て使用している事実の把握も、正確になされていた。

この対象者の失語傾向は大きいが、言葉を認識し理解する能力は、予想以上に高かった。プログラム指導者と対象者の意志の疎通は、言葉を基本にしながらも、筆談でかなりの部分が包括できた。共布や裏布の色の指定に関しては、実際の色見本を見ながら選択する事が出来た。布のレイアウトでは、指導者が言葉で説明しながら実際にイラストを描くことで、意思の疎通が図れ、細かい寸法の指示まで確認できた。また、プログラムの一環として、自発的に自己や家族について語ることができたことも、収穫であろう。

プログラム以後：自分の世界にこもる性質を持っており、淡々と織り作業を行っているように見えるが、他者の製作した裂き織りに対して興味を示した。織物活動に対する積極性は、他の3人と比較すると高いとは言えないが、織物経験を基盤にした適応が既にできていた為、今回の活動参加となったように思われる。作業や行程を通して、言葉が少しづつでるようになったり、他者への反応度が徐々に良くなっていったのが観察できた。

失語傾向であることは、他者と社会的関係を持つことが困難な場面が多く、次第に自己の社会が狭くなり自己と社会とに隔たりを作ってしまう傾向にある。このため、失語を取り巻く状況は悪循環に陥りやすい。このような対象者にとっては、裂き織りの作業・行程を媒介とした話題を指導者や他の対象者と共有することは、大変重要なことと感じられた。また、クッションに仕上がった裂き織りをもって写真撮影をしたときの、対象者の緊張した面もちには、日常の施設生活では見過ごされやすい、人としての品格も漂っているように感じられた。

●Fさん：68才女性・不全脊損・車椅子生活

プログラム以前：過去2年の織物歴があるが、片手での作業が中心となるため、織り行程のみに従事する。しかし目打ちを握り操作することが出来ることを発見し、それによって簡単なつづれ技法も自己の創意工夫として見つけだしており、織物活動に対する適応も良い。

プログラム途中：他の対象者の行程での進み具合を気にしたり、助言を与えるなどのリーダーシップ性を発揮していた。また、作業を通じたコミュニケーションづくりが他の対象者や施設職員ともできていた。片手指が自由に動かせないが、その障害をクリヤーするために、自ら発見した目打ちを使う工夫が、自己に対する自信となっている。デザインに関しても、三角形の使用や緯糸の縒りなどの斬新な発想の基に新しい試みに挑んだり、今まではできないと思われていた経糸張りも、工夫（1本の経糸で枠機を螺旋に巻いてゆく）を凝らし、自分で出来るようになっていた。しかし、それらと比較すると、デザインの選択・決定に関する主体性においては、今一歩進歩の余地を残していたようにも思われるが、この場合は、指導者等に対する「あまえ」（個的介入の要求）と理解したほうが相応しいと考察する。

プログラム以後：自己の製作品に対する誇りがみられた。また、裂き織りにより別の製作品を作ってみたいと思う意欲がみられた。全体の中での自己認識が高く、期待に答えるリーダーシップ的存在は、そのことによって自己実現がある程度なされ、得られる効果も高い。しかしその反面、個としての対象者の要求が、他者から、そして自己の中でも見過ごされてしまいがちである。より高度で多角的な作業活動を、このような対象者に与えてゆくことは、対象者の個としてのエンリッチメント（滋養）を進めてゆく上で、効果的であると考えられる。

●Pさん：81才男性・右足関節機能全廃・車椅子生活

プログラム以前：これまでは、他の3名の対象者の作業を傍観するに留まり、むしろ、織物活動を「無目的で

意味のない作業」・「有用性のないモノを作る作業」「女の仕事」と認識し、作業に対する否定的意見を発言し、寮母による活動参加への誘いも受け付けなかった。しかし、この度の介入調査研究を始めた時点（平成９年１０月）には、すでに7,8枚の裂き織りを製作していた。サイズは車椅子の椅子部分にちょうど敷けるようになっており、他の対象者によるこれまでのもの（幅約１５㎝X長さ約２０～３０㎝）よりも大規模なため、作業結果の有用性が第三者に容易に認識できるものであった。

プログラム途中：この対象者は、裂き織り活動を、自己のプロジェクトとしてすでに自分の中での位置づけを確立しており、その継続上でのみ、今回のプログラムを受け付けた。よって、自己の作業状況を我々の訪問時に照合するかたちでの参加となり、他の対象者とは異なる参加形態を保った。これは、他とは異なる個の主張と考えられる。

裂き織りの機に関しては、施設で廃品となるポリテープ（シーツ配達用）を経糸として用いていた。素材としての強度があるため、しっかりと枠機に経糸として結べるという利点はあるが、経糸としての表面は非常に滑らかなため、織り面の緯糸がせり上がってくるという難点があることに自ら気づいた。これを、ポリテープの経糸に複数の結び目を作為的に作り、緯糸に対するストッパーの役割を果たさせるという、自らの工夫で解消した。また、経糸に緯糸を通しやすいように、近くの山から採ってきた小竹を使って、経糸と枠機面とに空間を作らせていた。これに似た工夫は、これまでにも当施設の他の入所者によって登用されていたが、それは割り箸であったため、幅や高さが十分でない場合もあった。そして、織り幅が竹の長さより広い場合は、竹の端に割り箸を挿入させて延長するという工夫も行っていた。

布を裂く行程に関しては、１メートル程の長さの布の端に、一度期に多くの切り込み（２～３㎝）をハサミで入れておき、織る行程の中で必要に応じて、切り込みから布を裂いてゆくという、効率的なシステムを作り上げていた。

織り行程に関しては、割り箸の補助具を使用して、押し進めるようにしながら緯糸の挿入を行っていた。一般的な裂き織りでは、緯糸を変える際に生じる裂き布の重なる部分が表面に飛び出してしまいがちだが、これについては、それぞれの裂き布の端を、細く裂いたポリテープで２目ほど縫って、補強兼織り面の改良を行うことを考え出し、実行していた。

縞や色の設定に代表されるデザイン面においては、ほぼ無関心であった。他の技法（綾織り等）が掲載されている裂き織りの本を見せても、余り興味を示さなかった。織る行為は、主としてそれまでになされた創意工夫の結果の延長として、対象者に捉えられているように考察された。それ故か、織り上がった製作品の質の向上に関しても、関心が低かったが、裂き布の幅の不均一が生じさせた織り面の不均一に対しての不満は表した。この織り面の不均一は、裂き織りの特長であるとの説明を行ったが、本人としては納得がいかないようであった。

小市松という新しい技法の紹介・導入を行ったが、言語による説明の理解は多少問題があった。２種類の緯糸を交互に入れる行程は理解したが、その順番を一度崩し、再び同様の順番で２種類の緯糸を織り込むことで市松が出来ることは、理解出来ず、よって実施がなされなかった。しかし、この２種類の緯糸を交互に入れる行程を継続することで、この対象者は縦縞を織ることが出来た。しかし、その縦縞と織り面全体、さらには、それまで行ってきた横縞との関連づけでの発想展開はなかった。

プログラム以後：生活の生き甲斐つくりが出来たり、自己の有用性を証明できたように考察されるが、施設内での日課や行事参加の点において、寮母よりケアーを行う際の問題点も指摘された。作業に熱中するあまり、施設全体の生活の流れに則せない場面が生じてきたのである。施設内では集団を基盤として日課が組まれているのが一般的であり、この施設も例外ではないため、その集団的生活活動に支障をきたすことは、他入所者に対する影響や施設としての現在の運営方式上、問題となってしまう。これは、活動と生活のバランスの調整が出来ていないためで、熱中できる有意義な活動も、施設での生活環境においては、マイナス効果ともなりかねない。熱中できる活動をプラス効果として存続させるためには、それをメリハリのある生活リズムの基盤として取り入れる工夫が必要になってくる。施設社会と対象者自身の関わりの中で、自己を考えてゆく努力と自覚を促し、それを施設職員よりのきっかけ作りやサポートで援助してゆくことが有効であろうと思われる。

このように、この対象者は、「裂き織りプログラム」に大変適応が良かったわけだが、それが織物活動である必然性について考えるとき、疑問も残るのである。両手が使えるため作業も速いといった利点もあったが、この対象者の製作した裂き織りは約20枚程にもなり、その生産性には目を見張るものがあった。またいろいろな創意工夫をこらして織物活動に打ち込ませた理由は何であったのか。織物活動が自分で創意工夫できる余地を十分に持っていたことも一つの理由であろうが、その主なる理由は、彼の行った創意工夫の方向性が、すべて彼の中で

の「男の仕事」の定義に向かっていることに潜在しているように思われる。趣味や遊び、そして単なるレクリエーションではなく、意味目的があり、真剣で、社会的に認知される「仕事」のクオリティーを、この対象者は、たまたま出会った織物活動に求めようとしていたのではなかろうか。そう考えると、「裂き織りプログラム」実施にも、プログラムの中の他の受講者達とは、一線を画したかたちの参加であったのも理解できる。

(5) 施設職員：

実地調査時以外の、対象者への織物活動のサポートは、対象者の人数が4人と言うこともあって、充分なされていたように思われる。ただ、訪問時のプログラム指導が、他の施設活動（入浴・水分補給等）と重なったために、寮母のプログラムへの直接介入やオブザーブが手薄になってしまったように思われる。しかし、過去2年の裂き織り活動の実績があり、プログラムの全体の流れや各工程の把握もすでにできていたため、こういった状態でも、今後のプログラム指導者としてのオブザーブは達成していたと考えてよいであろう。

裂き織りのサイズが大きくなったことで、このプロジェクトに直接関与していない寮母にも作業活動への認識が高まった。特に、裂き織りのような単純作業の集積が本体になる活動では、その集積が多いほど、成果認識が明確になってくる。このような作業活動の場合、製作物のサイズは、活動の社会的認識に影響を与えると考えて良いのではないか。

クッションとして仕上がってきた製作品に対する寮母の反応は、施設職員としてよりも一個人としての反応や感動であったように観察された。施設における作業活動の成果品としてよりも、「よいもの」に対する正直な反応であった。クッションを囲んでのひとときは、生活指導する寮母と世話を受ける入所者という役割分担のなかのダイナミズムを越え、もの（この場合、裂き織りクッション）を通じて、ひととひとの会話ができていたように考える。そして、そのことを一番敏感に感じとっていたのが対象者であったように思われるのである。このように、作業活動に対する施設職員の反応や認識は、施設という社会に生きている対象者にとっては、予想以上に影響を及ぼしていると思われる。

(6) 施設機関：

裂き織りプログラム実施が、入所者にとってメリットが大きいという理解が施設側より得られたため、スケジュールや施設の他行事等との調整等において協力的であった。また、製作完成品の社会的発表の場を、文化祭のなかに設ける努力もあり、対象者の作業活動を通した社会参加を可能にしている点は、高く評価してよいと考える。

しかし一方で、プログラム実施の設定が、対象者としての入所者と、それをサポートする寮母（オブザーブ形態）を中心にしたものであったため、プログラムの中での施設としての介入や立場が明解でなく、プログラムとの距離が離れてしまったように考察する。

作業活動を施設活動としておこなってゆく上で、作業活動が時間軸で区分けされた孤立活動であってはならない。ひとりの個人に注がれる多くの活動のひとつが作業活動であり、施設での他活動との関連性や、対象者の多面的把握なしでは考えることが出来ないものである。その全体調整をコーディネイトできるのが施設の特権であり、対象者を鳥瞰的に把握できる立場にあるともいえる。施設運営関係者・寮母・プログラム指導者が集まり、全体と部分の関係付けをおこなう時間を持つことにより、対象者へのケアーの質の向上が期待されるであろうし、作業活動自体もより活性化され、施設における作業活動の位置づけも再確認できるのではないかと考える。

(7) 製作品：

手指で打ち込む力が弱いために、緯糸が不安定に織られ、布としての強度については比較的弱い。しかしその反面、柔らかな風合いが特長の織物となった。

デザインは、当初各対象者が描いていたものより、規模が縮小され、1枚の裂き織りの織物で1つのクッションを作る事となった。これは、デザイン時に、対象者の出来ることの把握が指導者が充分できていなかったことと、対象者が完成品の具体的予想が出来なかったために、デザインが具体性の低いものになってしまったように考える。また、計画と離れてしまった為に、出来上がりの予想が対象者には全く不可能となり、よって、計画に沿って目標に向かうことに挑戦する要素が欠けてしまった。（当初は、ユニットの組み合わせ方式を用いて、市松模様や方向の異なる縞で、クッションの一面を構成するデザインが多かった。）

裂き織りに使用された布の色についての選択は、施設の手持ちの布から行われた。選択余地が多いとは言えなかったが、嗜好や使用したい色についての欲求度が、対象者のなかで明白なものでなかったこともあり、色の選択は無理なく行われた。

ポリテープを経糸にしたものは、洗濯機と乾燥機によるテストを行った。洗濯時、特に脱水時に、織られた緯糸のスライドが起こったが、それは乾燥機による乾燥工程を経ると復元し、また当初心配されたポリテープの溶解・縮れ等も起きなかった。敷物等には相応しいが、衣

服のプロジェクト等には、肌触り・価値観等において問題があるように思われた。

裂いた布を織る行程は単純なため、ある程度の技術の精巧さを持てば、一定効果の出るプログラムである。技術の善し悪しが出来を決定づけるのではないので、対象者にとっては安心して実施できる作業活動であるといって良いであろう。そして、それが達成できた対象者に対して、以下の点に着目した指導を行ってゆくことで、さらに裂き織りによる作業活動を活性化させてゆくことが出来ると考える。

・色のデザイン（配色）
・布柄と裂く方向の関係
・裂く布の幅の変化
・縞による構成
・他素材との併用
・縒りの効果
・綾織り等の織り組織
・バイアス方向の布裂きによるテクスチャー
・完成品の品目の種類・サイズ・かたち等

5. まとめ

織物のサイズ決定から縫製指示まで、全行程に何らかの関わりを持たせるチャンスを入所者に提示したことで、入所者の織物活動に対するモーティベーションを高めることや、さらには今まで不可能と考えられていた動作・機能の中においても、遂行できたものもあった。また、それらの身体的及び精神的効果を基盤として、より質の高い織物作品を作業実施者が製作できたことは大変意義深いと同時に、入所者そして職員によるその事実認識ができたことが、これ以降の織物活動の活性化をさらに進めるであろうと予測された。

また、専門高等学校のボランティア協力参加をコーディネイトすることで、織物活動の成果である裂き織りを完成品をとして認識できやすいかたちの「クッション」につくり上げることができ、特にモーティベーションに関する予想以上の効果を、作業実施者および職員、そして施設側よりも得ることができた。

精神障害関連施設 C（知的障害者更生施設）

1. 研究の方向性

・授産効果の向上-----現在実施されている草木染と原毛を用いた織物活動を、その特性を生かし授産性の高いものになるよう（製作品の質の向上・商品価値を求めて）、製作品企画及びそれに関する技術指導を行う。
・作業の安定化-----現在実施されている草木染と原毛を用いた織物活動を、各工程をよりスムーズに作業指導員より入所者が指導を受け、かつ実施できるように（作業指導員の負担減少・作業自体へ自動の焦点が置けるように）、製作品企画及びそれに関連する技術指導を行う。

2. プログラム作成の留意点

・草木染や原毛の特性を生かした製作品-----縫製等による製品のレベルアップ：ボランティアの必要性/ 縫製部分を最少に（ボランティア依存を最少に）企画・製作する
・行程の簡易化

3.「草木染原毛織りプログラム」実施内容

10/27/97
施設管理者および職員との訪問調査研究全体の調整

11/18/97〈プログラム訪問第１回目〉
原毛精錬・草木染行程

12/02/97〈プログラム訪問第２回目〉
経糸張り・緯糸作り・織り行程

対象者に経糸となる2色のアクリル糸を選ばせる。色に関しては、対象者の嗜好を重視して良いが、対象者が認識区別できやすい配色を指導する必要がある。

２色の経糸を、追いかけループ形式で、木枠機の釘に引っかけてゆく。対象者に経糸の回路パターンを把握させるのに、かなりの苦労を要し、結局全行程を指導者・作業指導員の常時介入・指示のもとでの実行となった。しかしこの行程も、木枠機の釘の色分け等の工夫等により、対象者の主体的実施も促進される可能性もある。

未染色および草木染の原毛のカーディングされたものを、手で適量裂く。それを粘土でひもを作ってゆくように、手のひらを使って紐状にローリングし、ロービングを作ってゆく。作るロービングの長さは、使用する木枠機の幅より20cm程長くする。太さは直径2～3cm程にするが、均一にする必要はない。

カーペット状のざらざらした表面の上でのローリング作業や、少量の中性洗剤を溶かした水を、スプレーミストでロービングに噴霧し、原毛と手のひらに摩擦負荷を付けてやることで、この作業はより行いやすくなる。

原毛のロービングを緯糸にして、木枠機を使って織ってゆく。緯糸を通すために、経糸をピックアップしてゆく行程に、色による判別を導入する。また、緯糸が１織

り毎に終結しており、織り１回の行程がそれ自体完結した行程となることで、右左の挿入位置の変化と、経糸のピックアップの相互性との関連性への理解がなくても製織できるようにした。１回の製織に関して、対象者は同色の経糸をピックアップし、その出来た空間にどちら側からでも緯糸のロービングを挿入してゆけば良くなったのである。同色経糸のピックアップの順番は守らねばならないが、対象者にとって、製織が認識しやすいものとなったため、今まで以上に織り行程の正確さとスピード・確実性が高まり、作業指導員による作業の介助度を低下させることが出来た。

緯糸がロービングであることより、その打ち込みが指で簡単に出来るようになり、またその弾性や、製織後に予定されるフェルティング行程のため、打ち込み自体に要求される作業の正確さを初めとする重要性が低下され、織り行程全体の簡略化が図れた。

01/20/98〈プログラム訪問第３回目〉
緯糸作り・織り行程・カーディング（視察指導）

いろいろな色の原毛を混ぜてローリングし、１本のロービングの中での色の異なりを楽しんだり、次に挿入する緯糸をどんな色にするかと考えてゆけるということは、作業に対する正解・不正解の流れとは別の場面作りをすることにも繋がる。そういった選択の余地を作ることで、対象者の自己実現の場を作業活動につくり、作業への動機付けや楽しみを通じて、長い目で見た精神的効果も期待できると考える。

緯糸作りのローリング行程が予想以上に難しく、それは、ローリングの材料となるカーディングされた原毛の状態が不良であることに帰すると判断した。カーディングされた原毛には「だま」が非常に多く、全体の中での密度が大きく不均等になっていた。このため、いままで問題ないとされていたカーディング行程を、新たに現状チェックした。

以前）精錬時でフェルト化を起こした原毛を使用していたことが判明し、それが、カーディングの「だま」の原因であろうと予想された。よって、フェルト化されず精錬された原毛（プログラム中に精錬指導を行なったもの）を使用させたが、依然として「だま」の解消にはならなかった。また、一枚になった原毛に量がなく、薄いものになっていた。

現状）カーディングの実際行程を視察した。この作業を得意としている入所者１名によって、作業がおこなわれており、原毛をそのままドラムに押入れていた。十分にドラムを回転させていたが、カーディングの効果は、むしろ最初の挿入の段階（小ローラーで送られた原毛が大ローラーで引っ張ばられるとき）に決定されてしまうのである。その後に何度ドラムを回転させようが、その原毛の状態は殆ど変化しない。カーディング行程の改善に、新しく２つのことが考えられた。

改善案1）精錬された原毛に、ティージングという行程を行った後、カーディング行程を行う。ティージング（teasing）とは、原毛を手指を使って、解してゆく単純な作業であり、原毛の種類や使用目的によっては、これでカーディングの代用とする場合もある。絡まったり固まった部分や、団子状になっている部分に特に注意を払って、解してゆく必要がある。

改善案2）同じ原毛にカーディング行程を2～3度繰り返す。「だま」があるやせたようなカーディング後の原毛でも、2～3度カーディングを繰り返すことで、均一性が増してくる。シートになった原毛を、縦切りもしくは横切りをしながら、原毛を数個のセクションに分けてカード機に挿入してゆく。また、量によっては、複数枚の原毛を同様にプロセスしてゆくことで、１枚のカードされた原毛の厚みがまし、ロービング作りに適する。

カーディングに係わる作業行程のなかで、入所者が自己判断を下し行程を進めてゆくことは、作業自体が単純であるにも係わらず、かなり困難なように思われた。一作業づつを全体消化させ、作業指導員が次の作業工程へと指導してゆく必要があると考えられる。

02/03/98〈プログラム訪問第４回目〉
フェルティング・回収

石鹸液よりの水分が多くなりすぎないように留意する。単純作業でありながらも、織り表面の調子を見極めながら進めてゆかねばならないことや、手のひらや指先への加重のバランスが、対象者には予想以上に難しかったようである。石鹸よりでた泡とぬれた原毛から不思議なテクスチャー（手触り）が作業に生まれ、対象者はこの行程を結構楽しんでいたように思われる。

フェルト化が思ったように進んだ時点で、フェルティングを終える。この場合、緯糸同士が絡み合い、織物全体が一枚の面になり始めた時点を基準とした。また、フェルト化が進めば、織物のサイズも縮小することも、念頭に入れさせておきたい。商品を作る場合のフェルト化行程では、この時点で求めたいサイズの基準値を把握し、行程進行のガイドラインにすることも必要である。

織り行程では、緯糸の両端を織り込んでいないために、両端近辺の経糸が緩んできていた。それが、このフェルティングの行程でさらにその程度が進み、その結果、織物の両端の織り組織が崩壊し始める状況を生んだ。次の縫製行程での仕上がりサイズの縮小にも繋がるため、織

り両端がフェルト化されるように留意を払いたい。また、フェルティング中の洗濯ネットの使用も、両端の織り組織の崩壊防止にある程度の効果があることが解った。

02/06/98
縫製材料引き渡し・打ち合わせ

縫製行程を担当する高等学校に、その織物と必要な材料を引き渡し、縫製時の留意点を中心に説明を行った。学校行事や施設への引き渡しの希望日等を考慮しながら、高校の担当教員と縫製に関するスケジュールを決定した。

自らが縫製専門家であり、同時に今回縫製を担当する高校生の技術レベルも周知している高校教員の意見を求め、縫製に関する事項について話し合った。ミシンで裁断する外周を縫って、織り面の補強をすること・縁取りテープは、調整のし易い手縫いによること・完成サイズは今回特定しないこと等を決定した。

裂き織りクッションに関しては、織物製作者のそれぞれの製作品に対するコメントや自己紹介、縫製に関するデザイン等についての指示をシートにまとめ、織物製作者と縫製に関与する学生へのコミュニケーションを図り、プログラムとプログラムではなく、ひととひととの交流を強調させようとした。

02/23/98
縫製完了品受け取り

織物としてのよじれが縫製中やその結果にも影響して、完成のかたちが多少歪んでしまったマットもあり、これから改良してゆかねばならない良い資料となった。これに対して現在考えられる改良方法の一つには、織物の密度を上げたりフェルト化を高めることで、布としてのよじれの要因を低くすることが考えられる。

縁取りテープの色のちがいにより、マットの印象に予想以上の変化があった。草木染めされた原毛の色は、どうしても類似した色の組み合わせになってしまうが、経糸の色や縁取りテープの色の選択と組み合わせで、同じ商品ながらもバラエティーの提示が可能であることが確認できた。

02/24/98〈プログラム訪問第5回目〉
完成された製作物の受け渡し・ミーティング

縫製が完了された椅子マットに、添付しおりモックをつけ、パッケージで包装した商品に仕上げ、その受け渡しを作業指導員に行った。それを具体例に用いて、完成品・市場の獲得・対象者のプログラムに対する適応・作業指導員としての感想等について話し合いを行った。

製作物を、対象者に見せると、大変うれしそうに手をたたいて喜んでいた。知的障害のために、表現方法や手段が一般のそれとは異なりながらも、自分のやったことの成果に対する反応はあったと考察する。作業が遂行されたことに対する歓びや感激の存在は、今までに対象者の観察より確認されていることからも、対象者は、作業の遂行・完了を認識できており、それを通して情感の表現も可能であることが解っている。このようなことからも、精神障害関連施設に於いては、対象者が作業遂行出来る、安定した作業活動が効果的であると考えられた。

4. 研究考察

(1) プログラム実施時間：

13：30～15：00---90分であった。作業活動のポイントとなる行程を中心に訪問調査研究を行ったが、特に草木染の行程に関しては、正味の染色行程自体は90分内で行えたものの、その前後に係わる、染色に必要な道具類の準備や、使用道具類の洗浄・後かたづけ等に時間がかかってしまった。他行程に関しては、90分は適切な長さと考えられるが、草木染に関しては、途中停止が難しいという行程の持つ特質もあり、120分以上もしくは180分使っての作業にすることが好ましいと思われる。現実的なペースでも、全行程を完了することが出来、また準備と片付けも入所者参加が期待できるであろう。

(2) プログラム実施場所：

作業工程によって実施の場所を変更した。草木染行程は、水道やガスの使える調理実習室を使い、支障もなく全行程を終えた。調理実習室ということや環境問題・身体へ及ぼす影響を考慮して、媒染剤を初めとする草木染に必要な薬品は、極力害の少ないものを使用し、その安全な取扱を指導した。実施場所がいずれであろうと、有害薬品の使用のない行程推進が必要である。

ロービング作りや織り行程は、プログラム実施当初、別のスペースで他の手芸班所属の入所者とは隔離された状態で行った。その後、手芸班全員で作業室での作業活動へと移行したが、作業環境の違いは、彼らの作業において、問題要因とならなかった。さらには、この隔離の要素は、各対象者に対する、その作業活動の指導の密度の濃さと、深い関係を持っているように思われた。少人数の対象者と指導者が集中して作業活動に関わることは、対象者にとっても、指導者にとっても非常に効果的である。集団で動いてゆくことを一般前提とするこれらの施設活動のなかで、このような場面は、個に対するケアーの場として捉えることもできるのではないか。また、新しい作業活動の導入に関しては、このような少人数で

のトライアル的な試みを土台として、全体への作業活動に導いていくことは、大変メリットがあるように思われた。作業活動指導者にとっては、対象者が困難とする事柄の発見とその対処法についての事前学習とプログラム調整が可能になり、より良い作業活動の指導へと繋がることが予測される。また、幾人かの対象者に、作業活動のヘッドスタート的な経験や訓練を与えることで、全体としてのプログラムの流れをあらかじめ作っておくことが出来、その他の対象者への指導がより行いやすくなるとも考えられる。

フェルティングの行程は、湯と水の使える調理実習室で行い、調理台の上に置いた染色用ステンレスタンクの蓋の中で実施した。

(3) プログラム実施費用：

使用する主材料の羊毛は、他機関の理解と協力によって譲与入手ができている。草木染に要する道具・薬剤等、織り行程に用いる木枠機、経糸のアクリル糸等に関しても、すでに施設にあるものを使用しているため、今回は費用がかかっていない。カーディングに使用するドラムカーダーも同様であるが、新しく購入する場合は購入費が高くなる。

縫製に関しては、縁かがり用の材料が必要であるが、縫製の割合を押さえた製作品を企画した為、これも最小限に押さえられている。

またこの調査研究で、商品としての魅力付けのために、施設のネームラベルや添付しおりの作成、およびパッケージを一例として提示したが、それらを実施してゆくとなると、それに係わる費用も必要になってくるが、施設として対処できる範囲と考えられる。

(4) プログラム実施対象者：

●Rさん：28才女性・重度

プログラム以前：他の作業との適応が、作業工程への不適応・作業班内の人間関係等でうまく行かず、結局手芸班へ配置されてきた背景を持つ。手芸班内での活動は、去年まで、作業の良くできる入所者や先輩格の入所者の影になり、活発な作業参加はなかった。そのため、目立たない性格として作業指導員よりも把握されていたが、手芸班の先輩のいなくなった最近では、言語を通した自己表示も明確にできるようになっていた。

プログラム途中：対象者が、過去の織物活動参加では積極的参加ではなかったにもかかわらず、今回のプログラム行程の導入・実施が成功したのは、他の入所者への観察を通して、織物活動全般の行程導入が行われていた為と考察する。それに加えて、今回のプログラム指導が一対一に近い状況であったため、いきいきと作業工程を実施し、動機付けもできた。

1つの行程を習得するのに時間がかかった。自力で実施したい意欲が高いために、学習のループを完結する辛抱がなかなかできず、「らしき行為」を真似る程度に終わってしまい、行程に対する自信がもてないようであった。しかし、もう1人の対象者の作業を観察しながら、作業習得を行っていったことは、社会状況の中での他との関連性の中で、自己を考え、行動することの可能性を持つように思われる。

この対象者は、言語を通した自己表現に長けることや、プログラム指導者が施設部外者で新しい興味をそそることもあってか、作業中に指導者との会話を頻繁に持とうとした。リラックスした状態で、楽しみながら行える作業活動であったことからも、対象者は指導者との新しい人間関係を、この場合会話によって確認していたのかもしれない。作業自体を簡略化していたので、無理なく作業が消化できた。この対象者のケースは、指導者が「あまえ」を受けとめてやることで「受容」を対象者が確認し、その人間関係の信頼感を基盤にして、作業活動の訓練に向っていたようにも考察される。

プログラム以後：当初難しかった織り作業も習得ができ、それに関する技術やスピードも非常に向上した。プログラムの終わり頃には、この作業活動のリーダーな存在となり、安定して作業をこなせるようになり、作業に対して自信を持つようになった。

日常生活の中で、作業活動についてを楽しい話題に上げることが多くなった。作業活動時間を、心待ちにするようになった。

●Sさん：30才女性・重度

プログラム以前：本来静かな性格もあり地味な存在であるが、手芸班での作業は、実施が出来ていた。今回のプログラム実施対象者に選ばれたのも、その実績があった為である。

プログラム途中：能動的に、作業工程に参加しようと言う意志の表明はなかった。また、作業を通じての自己と社会（他者・環境等）の関係づけは明確にできていないようにも観察されたが、自己と作業との関係づけは出来ていたように思われる。よって、説明や指示を受けると、作業に集中することが出来た。また、非常に几帳面で、細かい仕事をする性格を持っていることは、染色用器の後始末の洗浄を実に丁寧に行うことよりも、観察で

きた。

その性格は、織りの行程にも顕著に表れていた。経糸を２色にした工夫も要因の一つであるが、経糸のピックアップの間違いがなく、その後の行程である緯糸の挿入と合わせて、織り行程の作業が、ゆっくりながらもうまく実施できていた。

緯糸のロービング作りに関しては、導入時に困難を伴った。この行程が、対象者の持つ手指機能以上を必要とするものであったからであろうか。得意な織り作業の中でのロービングの役割と関連づけをさせながら、動機付けを図った。

プログラム以後：織り行程は、当初より実施できていたが、プログラム終盤時には、その作業の正確さが増していることが、確認された。ロービングを作る作業よりも、織りが得意であるという意識があるためか、織り行程を主にした作業活動になっていっていることも、興味深く思われた。行程に対する得意・不得意を、自分で決定しており､作業の自己分担の選択をしているのである。この場合、作業と自己との関係のなかで考えられているように思われるが、他者との関連性も微妙に影響している可能性も考えられる。

(5) 職員：

手芸班担当の３人の作業指導員の持ち回りで、毎訪問時には、１人の作業指導員がプログラムに参加した。行程内容の指導が、他の指導員に充分に伝わっていない場合もあったが、プログラム指導者よりの技術指導や知識の教授に関しては、それが具体的であった為、効果が得られていたように考察する。同時に、いかに専門技術や知識が、年月を経た作業指導員間の伝承中に、風化してしまっていたかを目の当たりにした。

織物活動の今までの実績と作業指導員としての経験を基に、作業工程の指導が日課として対象者に行われており、彼らがプログラム指導者として、実際に作業活動を運営してゆけることを実感した。

ロービング行程やフェルティング行程において、対象者がうまく適応できない場面があり、その改善策を彼ら自らが見つけだしたことに着目したい。これらの問題解決によって、作業指導員は自信をつけながら、プログラムと自己との関係を育てて言ったとも考えられる。完全に構築されたプログラムを一方的に提示するよりも、この場合のようなインターアクティブな相互協力の良さが発揮できる場をプログラム中に設定しておけば、その施設状況・対象者・場面にあった、よりよいプログラムが自主性を保ちつつ形成されると考える。

(6) 施設：

施設の織物活動関連備品や設備が充実しており、過去に購入した材料（薬品等）や備品の活用により、プログラム実施はスムースに実行できた。その充実した備品・設備の有効活用に焦点をおきながらも、それにとらわれない作業活動の展開が必要であろう。

学園式の施設運営のため、施設の設定する活動枠のなかでのプログラム実施となったが、割り当て時間内で実施できた。また、手芸班活動の傘下であったので、手芸班担当指導員３人の内、１人がプロジェクトに参加できるような配慮もあり、施設側よりプログラム実施に対する理解と協力があった。

今回のプログラム実施を通して、製作品の授産を目標とした製作品の質の向上や魅力ある商品企画・作業の安定性に関して、ある程度の可能性を示すことが出来たように思われるが、授産増大を現実にするためには、福祉領域を越えた一般市場の獲得が必然と考える。その為には、プロトタイプによる、市場での製品に対する反応や意見を集める市場調査が基本である。また、一般市場で他の商品と対抗できる質の高い商品を作ってゆかなければならず、研修参加等を通して、作業活動指導員の専門知識の充実と向上も必要になってくる。施設運営上の問題もあろうが、作業活動の活性化に関して非常に大切な事柄であるため、雇用者である施設の理解とサポートによる実現を期待する。

(7) 製作完成品：

織り（経糸のピックアップ/　緯糸の挿入）のミスが時折あるものの､それが大きなマイナス効果にならない、使用素材の持ち味を全面に出した商品に仕上がった。

フェルト化の基準設定が望まれる。今回は、実験的要素が多大であったため、製織後のサイズ・フェルティング行程後のサイズ・縫製後のサイズに要求値を求めなかったので、データの収得ができていないが、商品企画には必要用件となってくる。

添付しおりについては、商品名・製作施設名と住所・実施行程列挙等をあげながら、自然志向性やオリジナル性の高い手作り品であることを、消費者に伝える目的でモック作成した。同様に、施設名の入ったネームラベルは、ラベル効果を確認する目的で試製作した。これらは商品としての魅力付けに効果的であることが、実際作業指導員よりも視覚確認された。また、施設名が入ることにより、施設から送り出す商品のアイデンティティ確立にも関与すると考えられるため、今後は、材質・種類・価格・デザイン等において、吟味しながら決定してゆく

必要がある。

セロファン袋を、商品パッケージとした。当初、化粧箱等によるパッケージを計画していたが、商品の予想設置場所や、打ち出したい商品イメージを考えてゆくと、カジュアルなディスプレイで消費者層を拡大したい思いもあり、変更に至った。セロファン袋を使ってのパッケージは、商品の特長である、草木染の色味と原毛による織りが、視覚的に認識されやすく、また包装紙無しでも、そのままギフト用に使用できる特徴を持つ。

5. まとめ

今まで問題であった、職員への負担度の非常に大きい作業である手紡ぎを、入所者に可能な作業「原毛の手揉みによるロービング作り」に変更させた。また、ロービング使用に係わって生じる緯糸の繋ぎの問題については、一織り毎に新しいロービングを挿入させて繋ぎの場面を削除したことで回避させた。

経糸については、経糸のピックアップを入所者に容易に理解できるように、2色の経糸を相互に枠かけさせることで、色による認識を導入し、この行程での安定が確認された。

フェルティングに関しては、後日、施設の共同浴室を使って手芸班全員で足踏みで実施され、この行程に関しての効率化と改善が行われていた。

このように、織物作業活動の各工程を、入所者の作業技術に直接影響されにくく、かつ入所者参加率の高いプログラムに変更させたことで、これまで困難とされてきた入所者の作業遂行が可能になり、それから生じる満足感と充実感が確認され、織物作業活動の活性化の可能性を提示することが認識された。また織物活動の製作品を、商品として縫製仕上げするために、専門高等学校の協力参加をコーディネイトし、作業としての織物活動の持つセクションワークの特性を強調させ、大きな社会枠で織物作業活動を考えて行く指針を提示する事ができた。

製作品には、素材を生かしたユニーク性と自然志向の特長を持たせており、市場での商品としてのプレゼンテーションは、それらの特長を強調させた施設名ラベル・添付ラベル・包装等を一例として施設側に提示した。このことにより、授産効果の増大を目的とする完結された一つのプログラムとして、作業指導員および施設が、明確に織物作業活動を把握することができ、作業全般の安定化と授産効果の増大に可能性が開けたと考えられる。

総括

作業療法としての織物活動の特質のひとつは、セクションワークによる作業活動の展開ができることである。これは、織物作業活動に関する各工程の分担化が可能であることのみならず、織物作業活動の全体を、その企画に始まり、作品・製品までの完成物に広げて考えるなかでの行程の分担とも考えることができる。それに対して、これまでの織物活動は、主として施設内のみで実施展開がなされ、また、セクションワークも作業関連行程だけに関して行われていた。このように、作業活動を現在の施設・施設職員が対応できる範疇のみで扱おうとしていたために、織物作業活動の完成品、さらには活動の効果が、作業実施者のみならず施設職員（作業指導者）・施設からも明確に認識されるようなレベルになかったのではないか。

今回の2施設（高齢者関連施設・精神障害関連施設）における介入調査研究においては、上述の仮定をふまえ、「織りあがったもの」をかたちとして明確に提示できることが必要であると考え、技術的専門性を持つ高等学校に協力を請うことにより、施設外のセクションワークの形態を導入した。

作業結果が認識しやすい完成品を、プログラムにおける製作品として、対象者そして施設職員に提示したことは、予想以上の好効果を生じさせ、あらためて福祉施設における作業活動では、作業結果の認識が重要であることを確認することができた。

そしてそのためには、完成品のレベルが、対象者の持つ技術や能力によって、影響はうけながらも決定要因にならないようなプログラムの企画と実施が、効果的であると考えられる。裂き織りに関しては、単純に織られた裂き布の繰り返しによる美しさが完成品の質を作りだし、今回の対象者によるものと健常者によるものとの差異は少ない。また、草木染原毛織りでは、素材の持つ力を完成品の魅力付けに利用し、織り等の技術の比重は低いものにしている。

また、施設職員が、施設外部との連携（ボランティアの要請・段取り・専門家へのアプローチ）に関するノウ・ハウ面での援助を必要としていることが、確認された。これに関しては、施設職員へのノウ・ハウ教示もしくはコーディネーターの施設内設置、または行政機関にそのアクセスを設置することにより対応できると考える。よって、行政レベルから可能なサポートとしては、上記の推進援助と共に、各領域における指導者・専門家のリストアップ、それらデータの集中管理とアクセスサービスの提供が挙げられよう。

おわりに

この研究は、繊維、特に織物活動に焦点を絞って行っ

たが、充実した福祉社会の実現には、福祉施設や作業の種類に係わらず、施設現場における作業療法のあり方自体を再認識しなおす必要があり、そして activities の種目に係わる専門領域（いわゆるここでは美術・工芸・デザイン等）と福祉領域の協調が、これからの社会の新しい局面を展開する上で非常に重要であると確認された。

高齢者関連施設と精神障害関連施設での、2つのプログラム実践例を通して認識できたことの一つとして、次のことが上げられよう。身体機能・言語能力・精神機能・知能などを、他の治療部門の専門家も情報としては入手できるものの、それらが意味することを分析し、療法活動に結びつけ、対象者の能力を最大限に引き出すこと、そして作業の持つ力を通して、対象者の興味・意欲を表現せしめることは、やはり作業療法ならではの分野である。この作業という、言語によらない活動を通して、療法士と対象者が人間関係を築いてゆきながら、対象者が喪失した自信・自己愛を取り戻してゆくことができることが観察された。

そしてもうひとつは、その回復された自信が、対象者の今までの作業能力や身体能力および一般的能力（理解力・表現力・学習能力・問題解決能力・順応性・適応力・新しいことに対する興味）をも変化させ得たことである。このことが日常生活動作、ひいてはQOL (Quality of Life) に繋がっていったのではないかと考えられる。

作業療法士のみに係わらず各分野での関係者が、あらためてそういった作業活動の有用性と、スタッフ間の相互協力と連携の重要性を認識し、それぞれの特色を生かすことで、対象者のより人間らしい生き方を援助できるのではないかと考える。

さらにこの調査研究で、種目専門領域と福祉施設の関わり方が、今後考察してゆかねばならない事項として把握されたのも収穫であった。作業療法士に種目専門領域よりアプローチをすることで、作業療法士の作業活動種目におけるレベルを高めてゆく方法や、種目専門領域が直接施設の対象者にアプローチをすることで、結果的に現場での作業活動を活性化させてゆく方法、そしてその二つを同時進行させる方法が、3つの大きな方向として揚げられよう。

専門領域の福祉施設への介入形態を考えてゆくとき、「ボランティア活動」に関する研究調査の必要性に繋がってゆかざるを得ない。福祉施設においては、スタッフ数の充実が望まれていたり、福祉領域内のみの展開で孤立化に陥っている状況もすでに恒例化されている。またそこでは、即効的な直接援助を渇望する「現状」を抱えていることも、無視できない現実である。福祉社会における「ボランティア活動」の重要性は、昨今誰もが認めるところであり、これからの福祉社会の形成には必須のものである。しかし、施設機関のシステムにおけるその位置づけ・意味付けを明解にしてゆかねば、「ボランティア活動」は単なる欠如の充填や人件費軽減の目的に利用され、真の福祉社会の質の向上には結びつかなくなってしまうどころか、結果的に「容易な出前制度」の蔓延を招き、ケアーの質の低下に繋がってゆく傾向をも作り出しかねない。

今回の調査研究に当たっては、技術的専門性を持つ高等学校よりのボランティアによる協力をコーディネイトし、その協力を得ることが出来た。これは、縫製技術という専門性を重視したボランティア活動の推進と、世代枠・機関枠を越えたインターアクティブな活動の両点の効果を念頭に置いたものである。福祉社会が私たち自身の社会であることを実感し、多角的な角度（領域・世代・社会・方法等）から、福祉社会を支えてゆかねばならない時代が現代なのであると考える。

謝辞

介入調査研究を御許可下さった各施設関係者の方々、プログラムに基づいて活動参加して下さった入所者の方々、作業活動のオブザーブ及び作業指導援助をして下さった施設職員の方々、そして、縫製ボランティア協力に御同意御協力下さった岡山県立岡山南高等学校関係者の方々に、改めて心より感謝申し上げたい。また、最後になったが、岡山県立大学保健福祉学部教授香川幸次郎先生、川崎医科大学付属病院リハビリテーション科作業療法士岡るり子先生より、この研究の共同研究者として平成7年度・8年度と同様に、平成9年度においても貴重な協力援助を賜ったことを、感謝の念と共にここに記したい。